

その後、匪賊の襲来はなくなり、じよじよに安定してきたが、私の職業のおかげでいつのときも災難から逃れることができたのを知り、しみじみとありがたく感謝した。この頃八路軍によって治安は治まり、農作業は案にできた。これもまたなにかと現地の人や鮮系の人達の厚意と協力があつてのことで、収穫も十分、ありがたく、嬉しかった。

二十一年九月一日になって、八路軍の兵士に守られて現地を出発することになった。途中、吉林・新京・錦州をへて十一月二十六日大阪に着く。かつての子ども達も四、五人を残しほとんど亡くなったことが残念で空しさをおぼえるのである。私に与えられたことは彼の地で亡くなった人達のために回向することであると思つてゐる。

橋頭で終戦、ギユウギユウの貨車で

福島県 岡崎 タカ子

私は、終戦を満州の橋頭で迎えた。家は満鉄の生計分配所を営み、満鉄の人達の生活物資の販売を満人三人を使用し、昭和十六年から開業していた。終戦の報で使用人と倉庫の塩、砂糖、小麦粉、油などの物資を暴動前に配給し、倉庫をカラにした。物資の暴動は起きなかったが、毎日が生きた心地がしなかった。使用人三人は、八路軍に入隊した。まもなくソ連兵が大勢入ってきた。私は満人に守られ、ぶじ逃げる事ができた。街の中には負傷兵があふれ、日本人は人民裁判にかけられていた。父は外出せず、情報を受け、じつと時を過ごした。私も妹も丸刈り頭で男装をし、屋根裏で生活した。ご飯をザルにいれてひもでつり上げて運んだ。便所はバケツにぼろ布を敷き使った。夜はローソクであかりをとった。治安が少々落ちついた頃には、妹と煙草売りをした。知り

あいの満人が煙草を卸してくれた。その仕事がなくなつたときは、甘辛ダンゴを作つて売りに行ったところ、おもしろいように売れた。材料がすぐになくなり、終わりになり引揚げのくる日まで辛抱した。

いつ帰国できるか不安な情報がとびかう中で、家財道具を売ったり、差し上げたりして、身のまわりの品を少々残した。帰国のときは、一人分は着物冬物、夏物一組と金千円也をそれだけときまつた。時計、指輪はだめとのことだった。かくして持っていた人は途中で取りあげられた。無蓋車で遼陽行きに乗り、ギューギューづめだった。苦しくともガマンして乗った。

いざ出発、途中いろいろあったが、錦州のほうに行くらしいとのこと、錦州に二泊し、コロ島に一週間ぐらいたがに過ごせた。大ぜいの中には、わが子の病気のために子どもを満人に預けた人や、わずかな金で売った人、お願いした人、いろいろな人生の縮図のような気がした。とても現在では考えられないようなさししまった状況は、想像を絶するものがあつた。

私達は、「これが祖国日本だ、ふるさとだよ」……涙が

とめどなく流れ、感激しあい、ぶじだったとこでほつとした。上陸したらDDTを頭よりかけられ、みんな白い頭になったが、嬉しくもなかつた。あさり入りのおにぎりを頂いた。そのおいしかったことは忘れられない思いでになった。列車に乗って郷里へ向かつた。内地の列車が小さく感じた。上野に着き、白光りのするおにぎりを頂き、もったいなくて食べずにいたが、お腹がすいたので拜んで食べた。帰国後は農業の手伝いをし、生活の再建を計った。

もう四十五年以上のこと、お世話になつた満人（張、陳、李）にお礼を言いたい。

銃に立ちはだかつた母の愛

東京都 齋藤 桂子

玄関のドアが荒々しく開けられて、八路軍の兵隊が二人、銃を手にはいってきた。

父は不在中で、母と知恵遅れの兄と、私の背におぶっ